

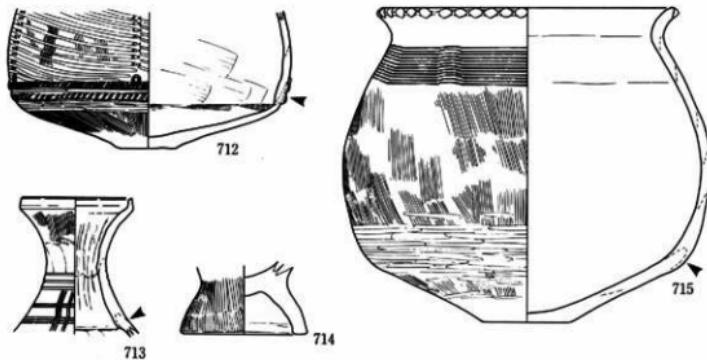
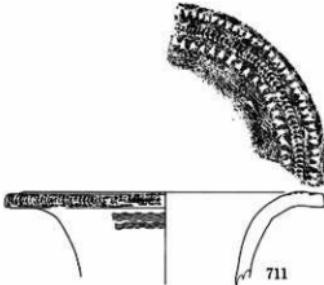
SB61 711は口唇部に半裁管状工具による刺突紋、口縁部内面に三角形刺突紋2段とその間に半裁管状工具による刺突紋を施す。頸部外面は波状紋のようだが風化は著しい。

712は磨消線紋系壺でII-2b期の典型。半裁管状工具の縦位刺突紋と櫛描波状紋を施した後に磨消線を施す。磨消線は縦位刺突紋で断絶するところとしないところがあり、磨消線の縦位分割はまだ確立していない。

713は細頸壺Aaで、櫛描紋e類系統の最新型式(*e'*類)で研磨帶が省略されている。713は頸部に沈線3条、体部には櫛田種(2・3)の横位直線紋と縦位直線紋を施し、磨消線は脱落している。口縁部のヨコナデは強く外面が凹面をなすので、III期に下がるかもしれない。

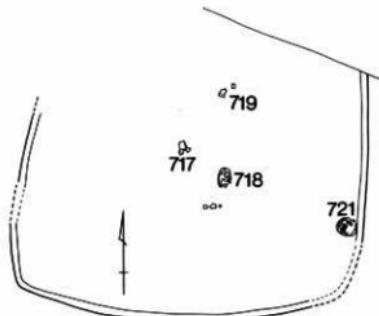
714は台付壺の脚台。接地面は内側へ微妙に拡張する。

715は大形鉢A。口唇部には指頭で大きな刻みを、頸部直下にはハケメ工具による直線紋を施す。形態的には、太頸壺成形第2段階で作られる。体部上下界の研磨がそれを示す。

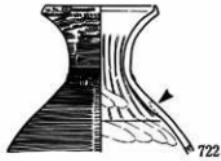
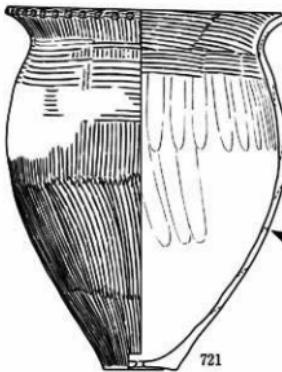
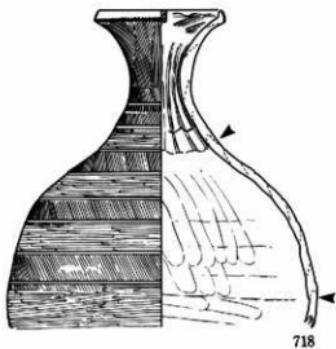
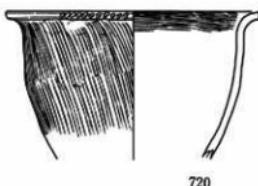


第118図 SB61出土土器

- SB67 716は太頸壺Aで、口唇部に指頭圧痕を施す。頸部に細い沈線をめぐらす。
- 717は細頸壺 Aa (磨消線紋系) でII-2期の指標となる。口頸部外面は櫛摺紋が施され、上半部は波状紋、下半部は直線紋となっている。頸部の円形浮紋は端部が重なるぐらい密に施されている。円形浮紋には管状工具で圧痕が施されている。縦位刺突紋は櫛。718は細頸壺 Aa で、磨消ハケメ帯系。口縁部にはヨコナデの後に棒状浮紋を貼り付けハケメ工具圧痕を加えている。屈曲部にもハケメ工具刻みを施す。
- 719は甕 Af で口縁部に指頭圧痕を施す。
- 720は口唇部にハケメ工具による部分圧痕を施す甕 Ag。
- 721は甕 Dの有孔土器。2~3/cmの粗いハケメを施している。底部はやや上げ底をなす。体部内面はユビによるナデ上げが施されている。
- 次に説明する2点はSB67近辺で出土した土器である。時期的に並行するので取り上げた。
- 722は717と同類。口頸部の波状紋は振幅が小さくあまり整っているとは言えない。屈曲部には板?でD字刻みが施される。
- 723は、底部成形がdで、やや上げ底をなす。外面調整は櫛II種b類による条痕風である。内面にはハケメを残すので、模倣品かもしれない。



第119図 SB67土器出土状態 (1:80)

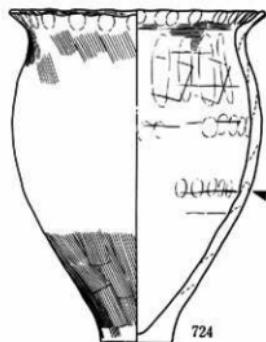


第120図 SB67・他出土土器

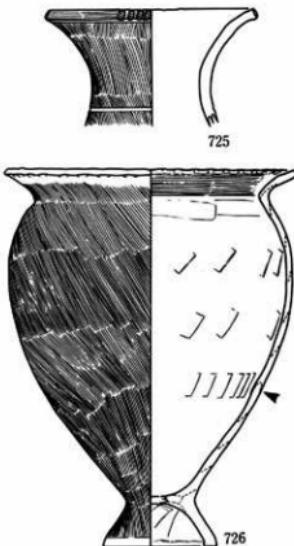
S B68 壺 Af である。口縁部に指頭圧痕紋を施す。口縁部外面より内面の方が圧痕の調子ははっきりしている。また口唇部は幅が狭くなっている。体部外面は上半の剥落が進んでいる。使用に関わるかどうかは不明である。

S B69 725は太頸壺Aで、ハケメ工具による部分圧痕紋を円周4分割の位置に施す。口唇部にはハケメを残す。頸部は沈線をめぐらしている。

726は台付壺A。口縁部には指頭圧痕紋が施される。頸部はく字状に外反して内面に稜を作る。脚台は接地面と裾外面にヨコナデが施されるが、内側に粘土のはみだしがある。体部内面は板ナデ。



第121図 SB68出土土器



第122図 SB69出土土器

SB71 床面直上に土器や石器が遺棄されていた。伏せた状態で出土した730の内部からはアブラナ科植物の種子が出土した。また、壁面での確認にとどまったが、白色粘土塊が2つ床面直上に遺存していた。

727は口縁部内面円周4分割の位置に3ヶ1単位の瘤状突起を貼り付ける。頭部から体部には櫛描紋を施す。体部は櫛描紋 β 類の手法と共通する。

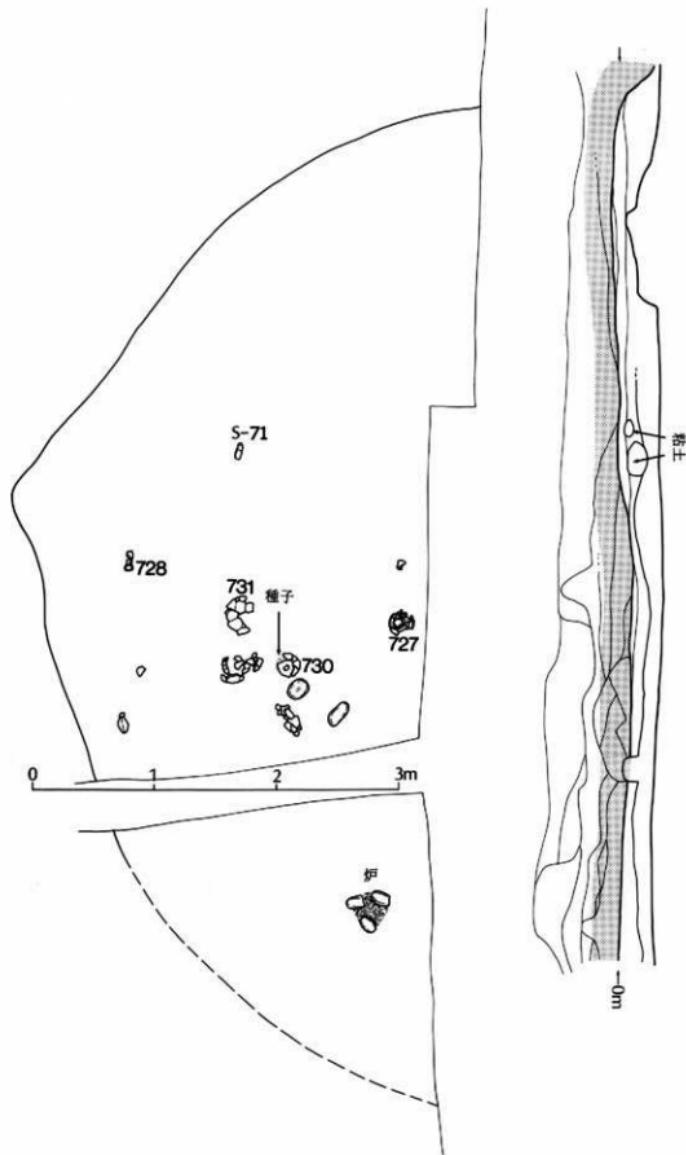
728・729は細頸壺 Aa。櫛描紋 γ 類。729は縦位に粘土紐を垂下させている。730は細頸壺 Aa の体部下半とおもわれるが、最下部外面に研磨は施されていない。731は櫛描紋 ϵ 類。732は深鉢 Cb。底部成形はd。

733は729と同類。734は櫛描紋 δ 類だが粘土紐垂下ではなく橢円形浮紋の貼り付けであり、右の模式図のように、ハケメ工具による圧痕は橢円形浮紋の上だけでなく器面にも直接当たっている。以前は浮紋上へ丁寧に施されていたから、浮紋を意識しないでハケメ工具圧痕を施しているようで、かなり形骸化していると言える。また磨消線も浮紋のところで断続しており、浮紋や粘土紐を脱落させ刺突紋のみとなるII-2期に近い様相を示している。II-1期でも新しいと言えよう。

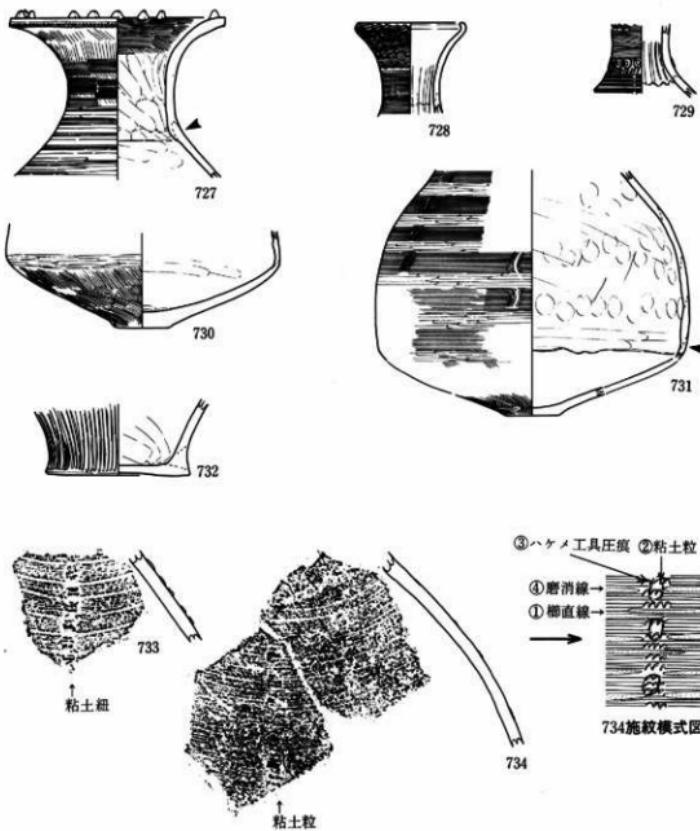
以下の写真は棒状礫を3つ並べて「石囲い炉」状にした炉で、棒状礫は叩き石の転用である。



第123図 SB71 炉石（左：南東→北西、右：北東→南西）



第124図 SB71遺物出土状態・東壁土層セクション (1:40)



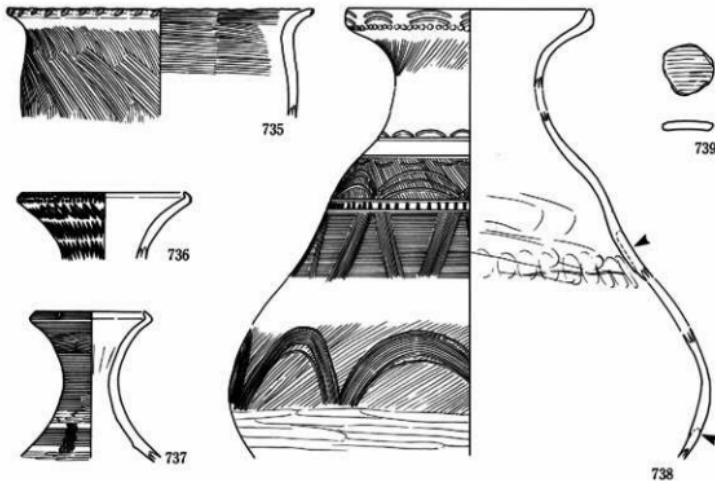
第125図 SB71出土土器

S D09 740は太頸壺A。口唇部はハケメ工具による刻み、頸部外面には櫛描波状紋を施す。細頸壺 Aa は、口縁部については施紋手法から、櫛描紋系 (736・737・745)、二枚貝刺突紋系 (742) の 2 グループに分かれる。体部施紋は、磨消線紋系 (741・744?)、櫛描紋 e 類系 (743・745)、ハケメ磨消帶系 (747・748)、櫛III種 (3・2・3) を原体として横位櫛描直線紋とそれを切る縦位櫛描直線紋の構成をとるもの (746) がある。741は太頸壺であり、頸部に「X」状刻みを施す。

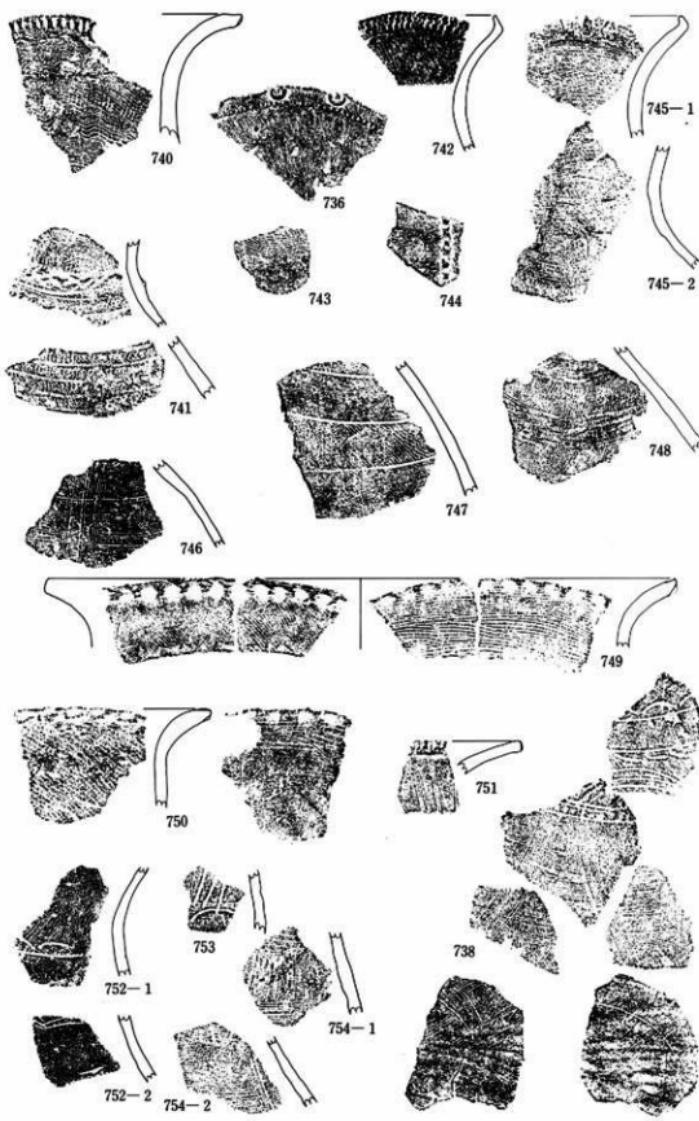
要は 749・750が Af、735は Ad。

B 系統 738は太頸壺 B 系統。受口状口縁は外面に沈線の連弧紋、屈曲部には断面の丸い刻みを施す。頸部は櫛II種 a 類による右上方から左下方への斜条痕、隆起部は斜条痕の上に上下に相対する沈線連弧紋、櫛描紋との境には付加沈線櫛刺突紋、体部下半は櫛描連弧紋を施した後、に上下に付加沈線を弧状に施して区切る。体部下半の成形第1段階の接合面付近はヨコナデを加える。752・753も恐らく同類で、沈線の連弧紋が観察できる。754は櫛II種 A 類の施紋以外観察できない。

さて問題は、以上の土器群が一時期であるかどうかである。櫛描紋 e 類系は縦位波状紋の振幅がかなり小さくなっているので新しい様相といえるし、741の磨消線紋や746も新しい様相である。したがって、B 系統壺にはやや古い様相が認められるとはい、II-2 a 期にさげるのが妥当であろう。



第126図 SD09出土土器 (I)

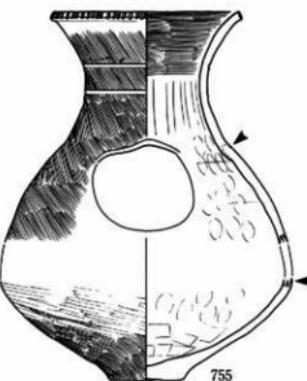


第127圖 SD09出土土器 (2)

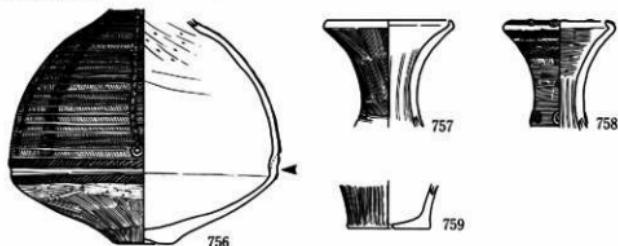
S K03 755はII期で唯1点の円窓付壺である。おそらく初頭であろう。口唇部はハケメ工具の刻み、頸部には沈線2条、以下はハケメ調整のみの無紋系壺である。赤桃色を呈する。

S K06 756~758は細頸壺Aa。756は櫛描紋f類。施紋は横位櫛描直線紋→縦位波状紋・粘土紐垂下→粘土紐上にハケメ状工具の圧痕→磨消線という順序である。磨消線は縦位粘土紐で断続する。底部は上げ底。黒色仕上げではなく暗褐色を呈する。757はおそらく磨消ハケメ帶系。口縁部にはヨコナデを施す。758は櫛描紋f系の口縁部である。口縁部の内傾が強い。黒色仕上げ。

759は深鉢Cb。底部に焼成前穿孔のある有孔土器である。



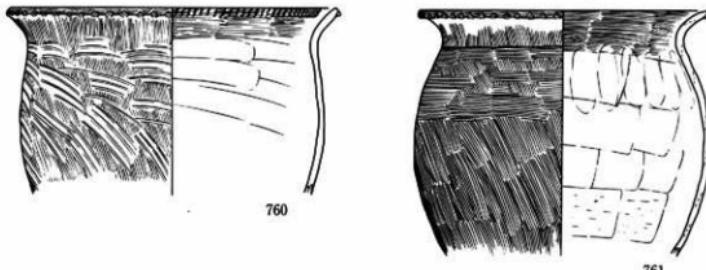
第128図 SK03出土土器



第129図 SK06出土土器

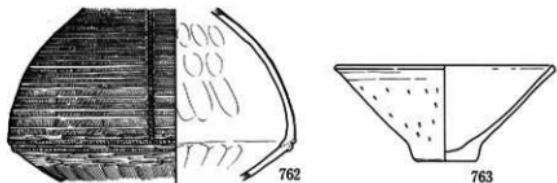
S K08 760は壺Ae。口縁部内面には二枚貝刺突紋、体部外面にはまばらに二枚貝調整が施されている。

761は壺D。体部上半にはハケメ工具による断続ヨコハケメが施される。



第130図 SK08出土土器

- SK 37 762は粘土紐垂下の後に磨消線紋を施す。縦位波状紋は施されていない。粘土紐には、ハケメ工具の圧痕が施されている。2条突帯には櫛刺突が施されている。
- 763は鉢 Ac。外面はケズリのようであるが、成形時にできた粘土の皺が觀察できる。



第131図 SK 37出土土器

- SK 67 764は台付無頸壺。口縁部外面には二枚貝刺突紋が2段、体部上半には磨消線、体部下半には研磨が施される。脚台部は強くヨコナデされ、内彎気味に立ち上がる。底部は充填によって塞がれる。

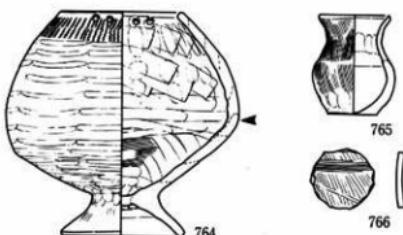
765は小形壺。口縁部は微妙に受口状口縁をなす。

766は土製円板。周囲は打ち欠いたままで未調整。

- SK 98 767は壺底部。底部外面は丸く突出する。

768~770は壺 Af。768は口縁部内面の指頭圧痕が強く施されている。外面は痕跡的であり、ハケメをそのまま残している。口唇部はヨコナデによって凹面をなすが、指頭圧痕によって皺ができる。769は口縁部外面の指頭圧痕が強く施され、内面は痕跡的である。770は口縁部内外面とも指頭圧痕が強く施されるけれども、内面のほうは圧痕ははっきりしている。

768や770は指頭圧痕のユビ形が明瞭に残っており、口縁部の調整という域は完全に脱している。指頭圧痕とした中には、圧痕が痕跡的であったようなものもあるが、こうした例を見るかぎりでは、一つの表現手法として認めて良いと考える。なお、指頭圧痕の施し方については、人差し指と親指で口縁部を挟み込んで圧痕を付けることは確実であるけれども、土器に対しての体の姿勢や指の當て方については充分確定できていない。768~770の場合では、圧痕の底にある1段深くなる部分が実測図で左側に寄っているので、おそらく右手であれば親指を、左手であれば人差し指を口縁部内面にくるようにして圧痕を付けたものと推測する。いずれにしても圧痕は→方向に施されることになる。

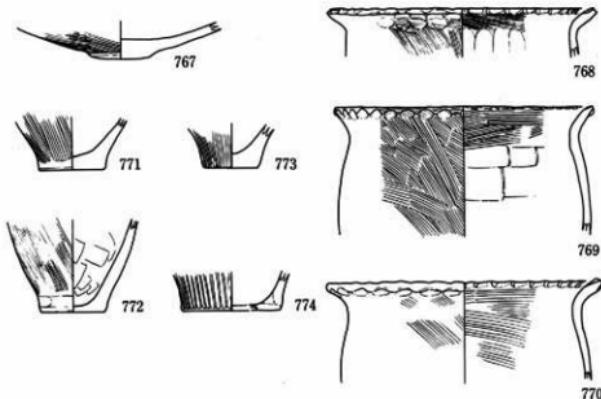


第132図 SK 67出土土器

ただし、多くの指頭圧痕もそうであるけれども、口縁部内面の圧痕と外面の圧痕の位置が相対せずに少し横にぎれて施される。もちろん、相対している例もある。

771～773は甕底部。

774は深鉢 Cb の底部。成形はd。



第133図 SK98出土土器

SK111 775は口縁部がラッパ状に開く壺。内外面とも粗いハケメが施される。

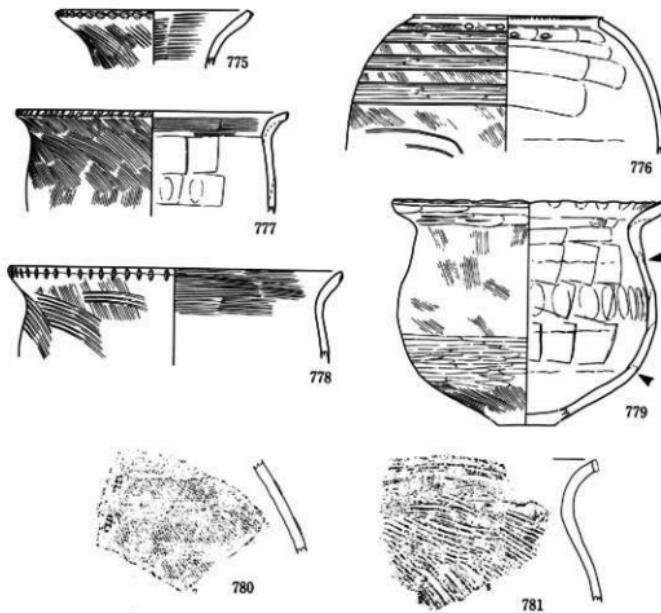
776は磨消ハケメ帯の無頸壺。だが、体部下半には沈線連弧紋が施されているようだ。また、口唇部も上方に拡張されて刻みを施しており、形態的にも純粹にA系統であるとは言えない。A系統とB系統との折衷型であろう。

777は甕 Ad。体部上半のハケメは778の二枚貝調整の施し方に類似している。778は甕 Ac。体部外面には二枚貝調整が雜に施されている。

779は大型鉢 A。体部は壺成形第2段階から製作される。口縁部には内面に指頭圧痕を残す。外面はナデで消されているようである。

780は磨消ハケメ帯。ハケメ帯の幅も狭く、多重化している。

781は甕 Ac。口唇部には部分圧痕を施している。



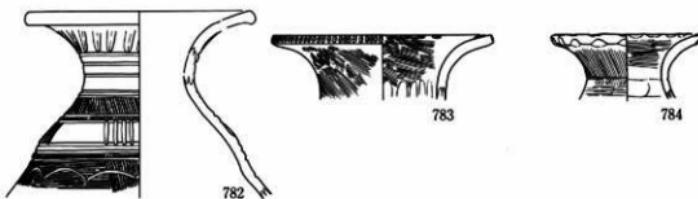
第134図 SK111出土土器

SK112 782はB系統壺。口縁部外面はⅠ期と共通する幅広のハネアゲ紋が施され、この部分のみ古い様相を見る。しかし、頸部以下は紋様が圧縮され、櫛描紋帯も減少しており新しい特徴を見せる。

783は口縁部内面に管状工具で圧痕をくわえた4ヶ1単位の円形浮紋が円周4分割の位置に施されている。

784は、口縁部に指頭圧痕紋を施す。

785は、1のほうは沈線を $2 \cdot 3 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 2 \cdot 3$ の組み合わせで施している。2は同一

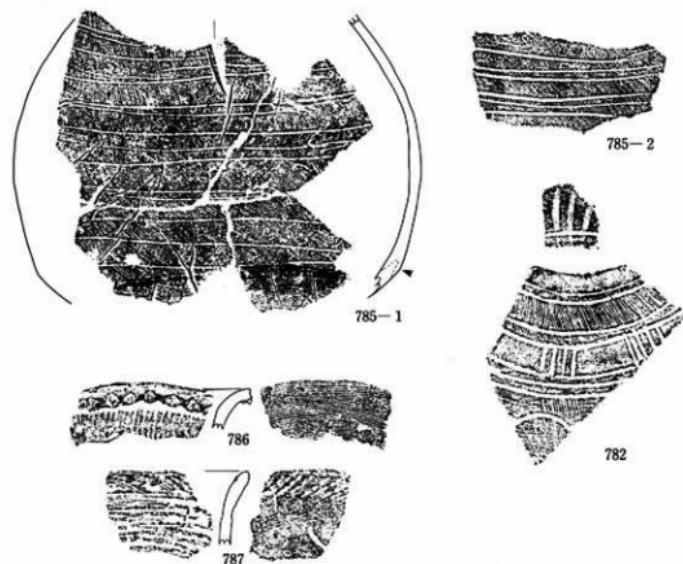


第135図 SK112出土土器 (1)

個体。沈線が3・3のように見えるが、上端の沈線が下の2条1組の沈線に近づいただけである。

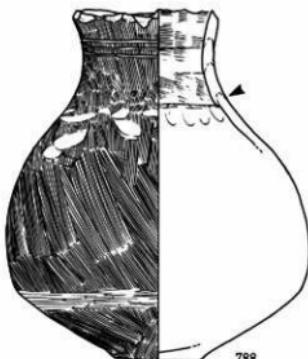
786は壺D。口唇部は垂下して、ハケメ工具による刻みが施されている。

787は深鉢 Cb。



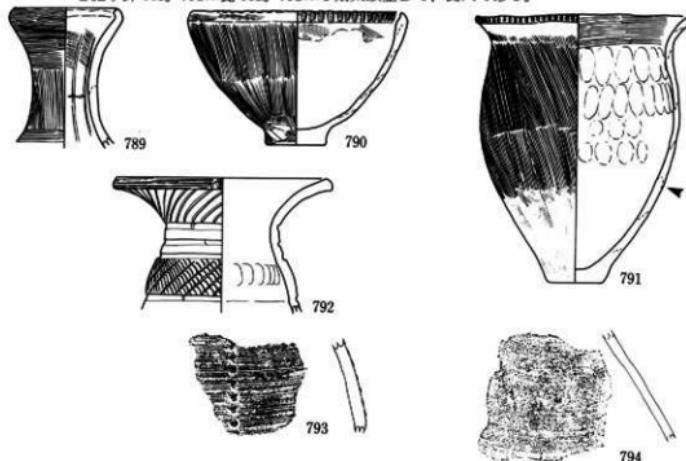
第136図 SK112出土土器 (2)

SK120 788は細頸壺Aである。口縁部は内側から外に向かって打ち欠かれている。頸部には沈線が3条めぐる。体部は無紋でハケメを残す。体部上半には、指があたってハケメの消えているところがある。



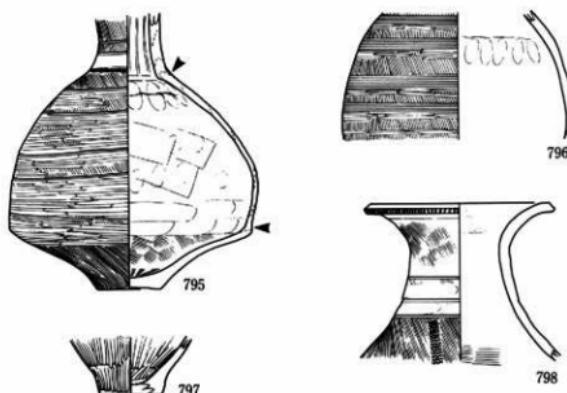
第137図 SK120出土土器

SK 122 789は細頸壺 Aa。整っていない櫛描紋が施される。790は口縁部内面にハケメ工具の圧痕を施す鉢 Ac。791は甕 Ad。792はI期太頸壺 Bで、混入である。



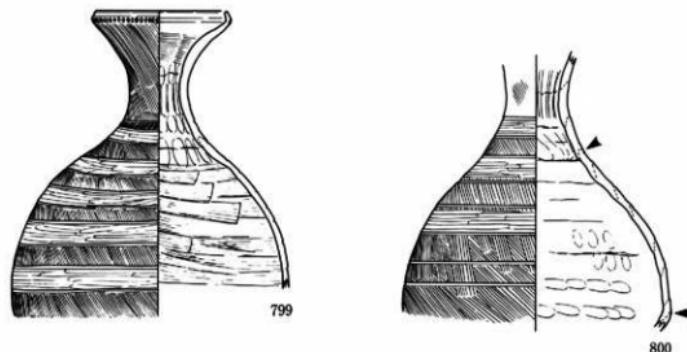
第138図 SK122出土土器

SK 221 795は細頸壺 Aa。磨消ハケメ帯は構成が崩れている。形態は体部上半が強く張り出し、半球状をなしている。796は櫛描紋 e' 系である。本例も研磨が粗雑になっている。797は鉢の底部。内外面とも研磨される。798はB系統かと思われるが確定はできない。口唇部と体部上半に二枚貝刺突の刻みと刺突が施される。



第139図 SK221出土土器

S K224 799は細頸壺 Aa。磨消ハケメ帯は典型的。口縁部は強くコナデされ凹面をなす。800は磨消ハケメ帯の最下段に研磨が施されていない。



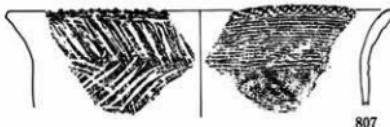
第140図 SK224出土土器

S K227 801は細頸壺 Aa。櫛描紋系。802は櫛II種 b類を原体として鋸齒紋が描かれている。803は口縁部内面に二枚貝刺突紋を施す壺口縁部。口唇部は凹面をなす。804は磨消ハケメ帯。805は口縁部にハケメ工具で横羽状刺突紋を施す鉢あるいは高杯である。806は口縁部内面に二枚貝刺突紋を2段施す高杯である。どちらも、精製の範疇に属する。



第141図 SK227出土土器

S K298 807は深鉢 Cbと類似するが、口縁部内面にはハケメが施され、その上から櫛刺突紋が施されている。体部外面は櫛II種 b類による条痕が横羽状に施されている。この時期にも深鉢 Cbは存続しているので、本例はかなり変化していることになる。A系統との折衷型である。808は壺 Ab。



807



808

第142図 SK298出土土器

その他の遺構

- S K 33 811は体部最下部に意味不明の刻線が描かれている。812は口縁部に指頭圧痕紋が施されている。形態は甕というより大型鉢に近い。
- S K 50 813は細頸壺 Aa。体部はおそらく磨消ハケメ帯を施す。口縁部はヨコナデされている。814は細頸壺 Ab。櫛描紋が施されている。
- S K 135 818は底部の作りが薄いので甕Dだろう。焼成後穿孔の有孔土器。819は焼成前の有孔土器。形態は甕形で、口縁部には指頭圧痕紋が施される。820は体部上半にハケメ工具の直線紋を施す甕D。口唇部は垂下しハケメ工具で刻まれている。821は大きな円孔を配する器台状の土器である。円孔の上下には浅い沈線が施されている。口唇部の内側が剥落しているので、上部に組み合う部分が載っていたのかもしれない。円孔や内面にはケズリ痕が顯著に残る。
- S K 206 824は小さな円孔を穿つ器台状の土器。
- S K 249 829は太頸壺 A (櫛描紋系)。口縁部は強くヨコナデされ口唇部は凹面をなす。口唇部は下端にハケメ工具の刻み、内面には波状紋が施されている。頸部は櫛描直線紋の上に二枚貝刺突紋が加えられている。830は太頸壺 A (磨消線紋系)。口縁部内面には円形浮紋の貼り付け痕が認められる。
- S K 287 831は口唇部に板?による刻みの施される細頸壺 Aa。体部は磨消ハケメ帯が施されている。
- S K 292 832は甕 Ab。口縁部内面にハケメ工具の刻みを施す。
- S K 296 833は磨消ハケメ帯系の細頸壺 Aa。834は口唇部と屈曲部外面に二枚貝刺みを施すB系統壺。
- S D 12 835は深鉢 Cb に類似するが、口縁部内面にはハケメの後に櫛ではなくハケメ工具の刻みを施し、体部外面も櫛 I 種A類の条痕を施す。A系統との折衷型であろう。836は口縁部のやや垂下する太頸壺 A (櫛描紋系)。837は頸部は櫛描紋だが体部は磨消線が施される。細頸壺と同様の紋様構成を示し、非櫛描紋化がうかがえる。838はB系統の太頸壺。口縁部には

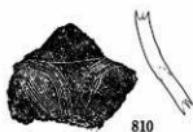
付加沈線二枚貝刺突紋は波状に施されている。黒色仕上げ。839は高杯の脚部。

包含層 809は無頸壺で体部に櫛描連弧紋を施す。櫛原体はIII種のようだ。口縁部外面には管状工具で圧痕を施した円形浮紋がめぐる。810は壺の体部上位で櫛描連弧紋が観察できる。どちらも、B系統と関係があり、折衷型だろう。



809

841はラッパ状に開く口縁部をもつ壺である。櫛描紋系であるが、e系のかなり稚拙な表現である。頸部の横位櫛描直線紋の下に施されている縦位弧線は、あまり見ない紋様である。



810

第143図 連弧紋をもつ土器

842は口縁部の垂下する形態を有する太頸壺A。口縁部内面には円周4分割の位置に3本1単位のハケメ工具圧痕を施した棒状浮紋が貼りつけられている。体部は沈線と磨消線が交互に施されている。

843は細頸壺 Aa (磨消線紋系)。縦位に粘土紐と波状紋が施されている。磨消線は粘土紐のところで切れている。体部下半には焼成後穿孔がある。

844は頸部に隆起をもつ細頸壺 Aa(櫛描紋f)。口縁部には円形浮紋2ヶに棒状浮紋3本が挟まれたものを1単位として4単位施されている。櫛は非常に細密、櫛 I種 A。折衷型。

845は体部に沈線を施すだけで研磨のない細頸壺 Aa。

846はB系統壺。紋様に櫛描紋が使われず、沈線紋を主とする。形態はIII-1期B系統壺に近い。体部には、沈線で連弧紋と「ハ」字状垂下紋を施した後、平行沈線間に二枚貝刺突紋を→方向に施している。おそらく、体部下半は連弧紋構成であろう。

847は沈線斜格子紋を施す精製鉢。研磨ははっきりしない。848は口縁部に鋭い刻みを施すが外面にケズリ痕を残したままの鉢。とても精製には含めることができない。

849・850は鉢 Ac。どちらも変形第1段階からの製作。

851は壺 Ac だが、口縁部には指頭圧痕が施される。底部は成形dなのでD系統との折衷型である。852は壺 Af。853は壺 Ab。

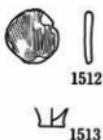
854は口縁部内面にハケメ工具刻み、体部上半に二枚貝直線紋を施す。855は壺 Ad。856は大形鉢 A。口縁部は「く」字状に外反し新しい特徴を示す。



1514



第144図 線刻のある脚状土器



1512



1513

第145図 土製円盤他

857は波状口縁をなすかどうか不明であるが、有段波状口縁壺の系列に属す。

土製品

1512は土製円板。1513はミニチュア土器。

1514は上面に刻線で图形が描かれている。

SK315から出土。